暖地における土壌侵蝕防止に適する

# ウィピング ラブ・グラスの栽培

安孫子六郎

**原産地と來歴**

ウィピングラブグラス（Weeping love grass）はカゼクサの一種で（Eragrostis Curauea）南アフリカが原産地である。わが国には倉田博士によれば一九四九年に青森種畜場、一九五〇年に農林省林業試験場で試作されたことが報告されている。

昭和二十七年雪印種苗株式会社がこの種子を米国より輸入し同社千葉農場その他で試作され土壌侵蝕防止用に極めて有望なることが認められ急速に全国各地に普及しつつある。

**性　狀**

毛髪狀の細長い葉を株から叢生し葉長は四尺〜五尺に達し垂下して地を覆う。晩春出穂して開花結実する。冬季は葉は枯死するが、根は越年して生長力極めて旺盛である。種苗時代やや軟弱であるが三〜四寸以上になると生長力が早く分蘖も旺盛でたちまち地面を覆う。特に耐旱性が強くハゲ山、ヤセ地、砂地等不良条件の土壌に適する。雨害及び暑熱にも甚だ抵抗性がある。暖地向きの草であるから札幌では越冬成績は良好でない。

東北以南においてはかなり条件の悪い土地でもよく生育するであろう。

播種初年目は出穂することが少いが二年目よりはよく出穂し七月上旬ころに結実し採種も可能である。種子は甚だ微細で一升粒数は百五〇万〜二〇〇万粒位である。

冬季には地上部は枯死するが根は相当の耐寒性がありよく越冬する。

**氣候、風土**

高温、乾燥には極めて強く乾燥地やハゲ山等によく生育し砂地のごときヤセ地にも旺んな生育を続ける。酸性土壌その他劣悪な土壌にもよく生育することは他の牧草類の及ぶところではない。この特徴があるため砂防、侵蝕防止用と愛用される所以である。

**利　用　法**

(1) 海岸砂防、ハゲ山、急峻なる傾斜面、極端なヤセ地等の緑化侵蝕防止となり併せて堆肥資源となり、家畜の飼料ともなる。しかし乳牛等は必ずしも好食しないが、馬、役牛、緬山羊はかなり喰う。

この草は前述のごとく生育が極めて旺盛で原野等に栽植して他の雑草を抑圧する。熟地に栽培するときは稚苗時代を過ぎれば全く除草等の必要がないほど雑草を駆除し地面に多くの有機質を残すので土地が膨軟化する。

**栽　培　法**

この草の繁殖法として直播法と育苗して定植するかあるいは株分けする法とがある。この草の種子は極めて微細であるから現地の傾斜面や、ハゲ山、海岸砂地、原野等に直播するは危険であるから苗床に播いて四寸〜五寸以上に伸びてから定植する方法が有利であろう。

苗床は畑地をよく耕起整地して畦幅一尺五寸位に条播する。普通の畑であれば特に施肥の必要なきも生長を促進するため堆肥二〇〇貫、過燐酸石灰一〇貫、硫安五貫、加里三貫位を施して播種する。特に注意すべきは覆土が厚きに過ぎぬことで、僅かに種子のかくれる程度に行うことである。特に乾燥するときは発芽するまで敷ワラ等を行うことにより揃った苗を得る。播種後軽く鎮圧して置くと十日位で発芽が揃う。幼苗は極めて小さく軟弱であるが三寸位になると目に見えて生長が促進する。

播種期は春蒔を行う。三月下旬乃至四月上旬より六月中、下旬まで随時播種が出来るが、秋播きは寒さに向うので枯れる危険がある。四月上旬播きで九月上旬には草丈二尺五寸余に達する。

定植期も春がよく、秋は晩くとも十月中旬までに完了し、晩秋の移植は成績が悪い。

定植を行うときは根元より三寸位残して上部を刈り取り一株径一寸乃至二寸位の大きさとし定植する。一坪の苗床より五〇〇株乃至六〇〇株の苗を得ることが出来る。

盛夏の候も定植には差支えないが、三月中、下旬より四月上、中旬頃までが最も成績がよいようである。海岸砂防や緑化、傾斜地の侵蝕防止用に植える場合は、エニシダ、イタチハギ等と混植することが好ましい。定植距離は土地条件により異なるも二尺幅に二尺〜一尺位の株間を適当とする。肥料として若干の堆肥や燐酸、窒素肥料を施用するとよい。

**收　量**

初年用の収量は大して期待できないが、二年用では普通畑地では一、五〇〇貫前後を収穫できる。砂地や傾斜地では条件が違うので一概にいうことは出来ないが、他の牧草類に比して常に収量は多いことは断言できる。

**採　種**

自家採種も簡単にできる。七月中旬頃結実した穂を蒐集して脱粒する。初年目の苗からはほとんど採種はできないが、二年目以後は反当り二〇ポンド前後の収穫はあろう。

また分蘖により株が拡大するから株分け法により簡単に増殖できる。

他の牧草の生育不振な土壌に土壌保全、緑化、堆肥資源、飼料用として是非栽植すべき有用な草である。

**（筆者は雪印種苗株式會社・千葉育種場長）**